

「共住懇」という少々かわった団体名称のホームページには、「新しいコミュニティのあり方を考え、開かれた地域社会づくりを目指す市民ボランティアグループ」と記されている。その活動拠点は大久保にあり、共同代表である山本重幸さんと関根美子さんほか数名のコアメンバーが現在の活動を支えている。

自ら地域を調べて地域に戻す

八〇年代から九〇年代にかけて、大久保の人びとはあらたな隣人の登場に困惑していた。歌舞伎町に隣接し、かつ日本語学校や専門学校が立地していたため、外国人ホステスや就学生・留学生等のニューカマーが急増したからだ。このような状況のなかで、新宿区主催のコミュニティ講習会「外国人とともにつくるまち」の参加者が九二年に発足させた自主学習会が、「外国人とともに住む新宿区まちづくり懇談会」（二〇〇二年、正式名称を共住懇に変更）である。

共住懇の活動は、自分たちと街との関係を考え、自ら地域調査をおこなうことからはじまった。外国人住民の増加とともに、大久保には、中国・台湾・韓国・タイ・マレーシア等の小さな飲食店や食材店が見られるようになっていた。自分たちで地域のことを調べて地域に戻す、それが九四年に作成した「おいしいまちガイド」である。一軒ずつ店を訪ねて外国人経営者に会い、どのような背景をもつ人びとが大久保で暮らしているのかを実感し、その調査報告としてエスニックレストランのガイドマップを作成した。

びとに向けて大久保の入門ガイドをおこない、街歩き要望に応え、多文化共生について語るという役割が共住懇に求められた。

転換期を迎えた大久保と共住懇

現在の活動の柱は、多文化共生社会と地域防災・減災の推進である。二〇〇五年以降、イベント系の活動は一段落し、東京都や新宿区の外国人支援・多文化共生に関するネットワークへの参加など行政との関係性を強めている。また共住懇代表として、山本さんが地域協議会等で発言する機会も増えている。二〇〇九年のおもな活動は、「しんじゅくアジアの祭り」と休刊していた『OKUBO』の復刊、「第七期 おおくぼ学校」の再開だった。

共住懇は大久保と寄り添いながら現在に至る。その活動を支えるメンバーは、時代によって入れ替わってきた。まるで呼び寄せられたかのように、そのときに必要とされる人材が登場し、あらたな活動を興して共住懇を牽引した。当初は地元住民中心だったが、現在は外部の人も多い。しかも各メンバーの想いと関心は一樣ではない。それぞれが自らの関心領域で主体的にかかわり、それらが集まって共住懇を形成している。

大久保は激しく変化している。特に、日韓共催ワールドカップとその後続く韓流は、多大な影響を及ぼした。しかし勢いを増しているのは韓国だけではない。小さなモスクを囲んでイスラーム教徒のための食材を扱うハラールフード店が急増する横丁、各国のエスニックレストランが次々と

多文化を
ささえる
人びと

共住懇の目指すもの、それは大久保でコミュニティをどう作るかだ。

新宿区大久保は多国籍の人びとが住まい働く街だ。地域の外国人人口は、三分の一を超えた。

「コリアンタウン」「多文化共生の街」を求めて、大久保を訪れる研究者やメディア関係者は多い。

その彼ら・彼女らが、大久保で最初に訪ねる団体が「共住懇」である。

稲葉 佳子

法政大学兼任講師

九〇年代後半、大久保は一大エスニックビジネス拠点に変貌していく。店舗数が急増し、ガイドマップは二、三年ごとに改訂され、二〇〇一年版まで発行された。

人と人のつながりを作る

九九年以降、共住懇の活動は大きく展開する。地域情報紙『OKUBO／おおくぼ』の刊行があり、さらに、その後の活動のひとつの柱となる防災というテーマが見出された。大震災で甚大な被害を受けた神戸市長田の人びととの交流がはじまったからだ。在日コリアンやヴェトナム人など多くの外国人が被災した長田の経験は、密集市街地で日本人と外国人が混住する大久保に重ねられ、人と人がつながることの大切さが確認された。

共住懇は、防災をテーマとするシンポジウムや映画祭、そして、いろいろな人びとが出会い交流できる「新宿益ダンス（現・アジアのまつり）」等を次々と仕掛けた。いざというときに助け合うには、まず知り合うことが必要だ。また「市民と自治体の協働による多文化共生推進のための政策フォーラム」開催など、外部団体との連携・協力事業も増えていった。さらに、その後の重要な活動となる連続講座「おおくぼ学校」もはじまった。これらの新しい活動を通して人と人が出会い、地元商店会や町内会と外国人キーパーソンがつながり、同時に共住懇も地域の人びととの関係を見出していった。

やがて、多くの研究者や大学ゼミ、メディアの注目が大久保に集まるようになると、これらの顔を揃えるストリートなど、大久保は多国籍の人びとが発散するエネルギーの渦のなかにある。そして今やホスト社会の人びとは、隣人となった外国人と幾つかの接点を形成している。それらは、両者が自ら切り開いてきた関係性である。共住懇以外の団体も活動している。

地域の人びとが自律的にコミュニティをマネジメントするようになった大久保では、共住懇は多文化共生にかかわるアクターの一人になりつつある。共住懇は転換期を迎えている。その活動のあり方や進め方は、これまでとは異なっていくだろう。しかし山本さんが常に「共住懇は発足以来、新宿というコミュニティをどうするかについて活動しています」と語るように、共住懇の目指すものは変わらない。

地域情報紙『OKUBO』



韓流で賑わう職安通り



タイルの装飾壁面が美しいトルコ料理屋

2009年しんじゅくアジアの祭りでおこなわれた防災イベント (提供・共住懇)



大久保通りの多国籍看板